

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 37 「偽りの言葉を捨てて」(2012年5月20日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

あなたたちは盗んではならない。うそをついてはならない。互いに欺いてはならない。わたしの名を用いて偽り誓ってはならない。それによってあなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。(レビ19:11-12)

「また、あなたがたも聞いておるとおり、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に對して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」(マタイ5:33-37)

## 【説教】

今日は、信仰問答の第36主日、問99-100のところを手がかりにして、御言葉に聴いてまいります。ここでは、十戒の第三戒、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。」を扱っています。第三戒については、今日のところと、次回読みます第37主日でも扱うことになります。信仰問答は、全部で四つの問答を用いて、この第三戒を丁寧に説明しています。

出エジプト記に記されています第三戒を見ると、次の警告が伴っていることに気がきます。「みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおられない」このようにはっきりした警告が伴うのは、十戒の中でもこの第三戒だけあります。それは、それだけこの戒めに関して、わたしたちは慎重にならなくてはならないということです。またこのことは今日の信仰問答でも反映されていて、問99では、そのような罪を黙認することや傍観することもその罪に関与することとして拡大して理解しています。また問100では、「神の御名の冒瀆ほどの方が激しくお怒りになる罪はない」と言い、それゆえ「死をもって罰するようにもお命じになりました」と答えます。非常に重くこの戒めを捉えています。どうしてここまで厳しくなるのでしょうか。しかし改めて考えてみますと、案外、わたしたちはこの戒めを軽く考えているところがあるのではないのでしょうか。

今日の信仰問答では「誓約」が一つの重大な問題になっています。聖書の信仰は、旧約、新約というように神さまとの「契約」が中心にあるものですから、キリスト教的な背景のある欧米諸国では比較的「契約」「誓約」が重んじられるところがあります。しかしわたしたちの国では「誓約」そのものもあまりよく知られていないということがあります。あるいは「選手宣誓」のような一種のパフォーマンスのようにしか捉えられていないということもあるかもしれません。

むしろそれは言葉の問題にすぎないのではないかと。一般的に言葉そのものが軽く見られている傾向があります。よく「うっかり口が滑った」とか「心にもないことを言ってしまった」と言います。「心ない言葉」という言葉もあります。まるで言葉と心が別々であって、ただ言葉だけが一人歩きしているかのように捉えられているのです。果たしてそうでしょうか。

時に、言葉は人を慰めたり、勇気づけるものとなります。またある時は傷つけたり、場合によってはその小さな言葉によって人が立ち直れなくなるような状況を生み出すこともあります。それが言葉の持つ力です。わたしたちはもっと自分の語る言葉に責任を持たなくてはなりません。「心にもないこと」というのは本来あり得ないのです。その心が言葉に現れてくるのです。今日の第三戒もまた、単に言葉の問題ではなく、深くわたしたち自身の内面と関係していることをまず自覚する必要があります。

更に、ここでは表面的に現れること、例えば、明らかに神さまを冒瀆する言葉を用いる。呪いの言葉や、偽りの誓いをする。

そういうことが問題になっていることは言うまでもないことでありますが、それだけではないのです。そういう神さまを冒瀆することが罪であることは分かりきったことです。詩編第90編8節に「あなたはわたしたちの罪を御前に、隠れた罪を御顔の光の中に置かれます」とあります。表面に表れない「隠れた罪」こそ問題です。ですから、むしろここでは明らかな冒瀆の言葉を吐くというより、わたしたちの内面に潜む隠れた罪を問題にしていると理解してよいでしょう。知らず知らずのうちに、神さまを冒瀆している、神さまの御名を汚している、そういう恐ろしい罪がここで明らかにされているのです。

さて信仰問答に注目しましょう。

問99第三戒は何を求めていますか。

答 わたしたちが、呪いや偽りの誓いによってのみならず、不必要な誓約によっても、神の御名を冒瀆または乱用することなく、黙認や傍観によってもそのような恐るべき罪に関与しない、ということ。要するに、わたしたちが畏れと敬虔によらないでは、神の聖なる御名を用いない、ということです。それは、この方がわたしたちによって正しく告白され、呼びかけられ、わたしたちのすべての言葉と行いによって讃えられるためです。

「神の御名を冒瀆または乱用することなく」とあります。この「乱用する」という言葉が、第三戒の「みだりに唱える」という言葉に当てはまります。それは「いたずらに」「粗末に」扱うことです。それはただ神さまの名前だけではなく、神さま御自身を粗末に扱うことであり、そこには神さまに対する「畏れと敬虔」がないのです。それゆえ必然的に、安易に神さまを持ち出してくるということが起こります。

実は、このことの背景には、旧約聖書に流れている一つの宗教観があります。どうして聖書は「神の名」についての戒めを取り上げるのか。それはその名を知る者は名前を知られた相手を支配するという古い宗教観があるのです。人がある神の名を知っていれば、その神を意のままに動かすことができる。その神の名によって祝福したり、呪ったりするのです。そういう神の名を使った呪術や魔術が行われたのです。ですからこれは単に名前、言葉だけの問題ではありません。その名によって神さまを利用することが起こる。そのように御名が用いられることを神さまはもちろんお許しにはなりません。ですから「罰せずにはおられない」とこれを厳しく戒めておられるのです。

しかし、これは他人事ではないのです。わたしたちもこのように神さまを意のままに動かすようなことをするのです。よく「これは神さまの御心だ」と言うことがあります。あるいは「そういうことが起こったのは神さまの裁きだ」と平気で言う人もおります。自分のことを正当化したり、人を裁くために神さまを出してくるのです。それは自己正当化、自己目的のために神

さまを利用していることに他なりません。それが神の御名の乱用です。そこでは、神さまは自分に都合のよい道具になってしまっているのです。それは神さまを必要な時に持ち出してきて、必要がなければ引き出しにしまっておくようなものです。よく言われる「苦しい時の神頼み」というのは、まさしく神さまの御名を乱用していることの典型でしょう。何かがあると熱心に礼拝に来るけれども、別に問題がなければ聖書も読まなければ、祈りもしない。わたしたちはそのように神さまを自分の都合のよいようにあしらっているのです。まったく「畏れと敬虔」がないとしか言いようがありません。

またこの信仰問答が記された16世紀あたりから、神さまの名やあるいは聖人の名を呼びながら誓ったり、口汚くのものするようなことが一つの流行のようになされたと言います。日本の言えば「天地神明にかけて誓う」というようなことでしょうか。なぜ誓約にわざわざ神さまの名を持ち出すのか。その最大の理由は自分の誓いを相手に信用させるためです。自分の言葉だけでは心もとないと考える。だから何かにかけて、それが真実であることを保証しようとするのです。

今日の社会においても、人に信用してもらうために、自分以外の信用のおける名前を出してきて、その関係を強調することがあります。大きな会社の名前を言って、相手を信用させようとする場合があります。それと同じように、神さまの名前を出して、自分の誓いを確かなことを主張しようとする。それは自分を正当化するために、やはり神さまを持ち出してきていること。神さまの御名を乱用していることに他なりません。そのようなことを平気でわたしたちはしているのです。

しかし、そのように神さまの名を出してきて、人を信用させることの背景には、如何に自分が不確かであり、偽りの言葉で満ちているかの表れではないでしょうか。そういう自分の偽りを誤摩化し、隠すために、わたしたちは神さまを利用するのです。信仰を利用するのです。もしわたしたちが自分の信仰の行為をもって自分を正当化したり、自分は正しく生きていると思えば、やはりそれも神さまの御名の乱用なのです。信仰の行為を笠に着て自分の罪を誤摩化している。それは律法を守ることで自分は正しいと自認していたあのフェリサイ派、律法学者と同じ過ちなのであります。しかしそれは見せかけだけの、形だけの信仰にすぎません。如何にわたしたちが偽りの言葉、偽りの行為で塗り固められているか。その罪の自分を神さまの御名をもって信仰深く飾り立てようとしているのです。

ここまで見てくると、如何にこの第三戒に関する罪は重いかということがわかります。それ故に、問100は次のように言います。

問100 それでは、呪いや誓約によって神の御名を冒瀆することは、それをできうる限り阻止したり禁じたりしようとする人々にも神がお怒りになるほど重い罪なのですか。

答 確かにそのとおりです。なぜなら、神の御名の冒瀆ほどこの方が激しくお怒りになる罪はないからです。それゆえ、この方は、それを死をもって罰するようにもお命じになりました。

「死をもって罰する」ほどの罪がここにあります。わたしたちが死ぬべきことは明らかなのです。けれどもこの罪からイエス・キリストはわたしたちを救い出してくださいました。この死をもって償うべきこの罪を主自ら負ってください、十字架で死んでくださいました。わたしたちに代わって、この恐るべき罪の罰を引き受けてくださったのです。そこにわたしたちが新しく生きる道が備えられました。もう神さまの御名で自分を飾らなくてもいい。もう神さまを利用する必要もないのです。内側からわたしたちは罪赦され、神さまを正しく呼ぶことができる者とされました。「アッバ、父よ」と呼びかける神の子としての新しい人生が始まったのです。「この方がわたしたちによって正しく告白され、呼びかけられ、わたしたちのすべての言葉と行いによって讃えられるためです」わたしたちがそのように

生きるためにキリストは命をささげてくださいました。

今日、読みましたマタイによる福音書の御言葉で、主イエスは「一切誓いを立ててはならない」と言われます。ある教派では、これを文字通り受け止めて、教会の中では一切誓約をしないという教会もあります。しかしこれはそういうことではありません。わたしたちはキリストによって、もはや偽りの誓いによって自分を正当化する必要がなくなったのです。キリストがこのわたしの罪を赦し、御前に正しくしてください。だからこそ、このキリストによって、わたしたちは、相応しい畏れと敬虔をもって、御前に誓うことができるのです。この口が、キリストによって、もはや偽りではなく、正しく御名を呼び、誓うことができるようにされたのです。

教会では誓約を重んじます。洗礼も教師や長老の任職も結婚も必ず誓約を伴います。でもそれはもはや偽りの誓いではない。キリストの犠牲によって、その命によって、わたしたちの誓約は絶えず御前に有効なものとなるのです。キリストのあがないを感謝しつつ、畏れと敬虔をもって、御名を呼び求める者でありたいと願います。お祈りをいたします。

イエス・キリストの父なる神さま。自分を正しくするために、神さまの御名を利用するこの罪をお赦しください。そしてもうわたしたちはキリストによってそのような重大な罪から救われていることを覚えさせてください。キリストの十字架と復活の御業が、あなたの御名を正しく呼び、あなたの御業をほめ讃える者へとわたしたちを造り変える幸いを感謝します。どうぞこの幸いの中で、あなたの御名を呼び続けることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。